

平成29年度第2回鳥取県総合教育会議 議事録

1 日時

平成29年10月13日（金） 午後2時30分から4時30分まで

2 場所

鳥取県庁 議会棟3階 特別会議室

3 出席者

知事 平井伸治
教育委員長 中島諒人
教育委員 坂本トヨ子
教育委員 佐伯啓子
教育委員 鱸 俊朗
教育長 山本仁志
教育委員会事務局 理事監兼博物館長 田中規靖
有識者委員 青戸 忍
有識者委員 石原太一
有識者委員 上萬貴志
有識者委員 津島 望
有識者委員 長曾加奈子
有識者委員 横井司朗
事務局 元気づくり総本部長 小倉誠一

4 あいさつ

(小倉部長)

- ・ただいまから第2回の鳥取県総合教育会議を開会する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げます。

(平井知事)

- ・本日ここに総合教育会議を開催する運びとなった。中島委員長をはじめ、教育委員会の皆様、また有識者の委員としてご参列いただいている皆様に対しまして心から感謝を申し上げ、敬意を表させていただきたい。
- ・鳥取県では、教育委員会と知事部局のいずれも住民や子どもたちの方を向いて仕事をしなければならぬので協議を始めましょうということで、他県に先駆けて教育協働会議というスキームをつくり、そこに県民のいろいろな考え方や素晴らしい知見を反映する意味で有識者の皆様に入っていただき、そういう教育協働会議を開催し、教育の方向性をつくり上げてきた。私どものその実務が、今では全国に広がっており、こういう総合教育会議というやり方が各県で行われているが、具体的な目標数値を定めるとか、またそれぞれの事柄に関してかなり突っ込んだ議論がされているのは、おそらく鳥取県ぐらいではないか。こうした良き伝統の中にまた数多くの有志の面々にも加わっていただき、新しい時代を教育のジャンルで開

いていけばと考えている。

- ・来年の10月末には、ワールドカデットチャレンジが開催される。世界中の15歳以下の子どもたち、例えば石川佳純選手であるとか、伊藤選手であるとか、丹羽選手であるとか、名立たる選手を輩出した大会である。その世界中の強豪が集まる大会が来年鳥取で開催されることになり、今その第一歩を踏み出したところである。それほどに、鳥取県は世界の中でも輝く人材を輩出し、またその研鑽を積む場となり得るところであると思う。子どもたちが叶えられる夢というものを私たち大人がサポートしていくことが我々の世代、上の世代の務めではないか。
- ・今、時あたかも総選挙が戦われており、期せずして教育が特に大きなテーマになって争われているところであるが、やはり今、我が国が本来向き合うべきは人材の育成ということではないかと思う。皆様にもここで大いに知見をお出しいただき、ご意見をいただいて、正すべきところは正し、伸ばすべきところは伸ばし、鳥取県の教育を方向づけていただければと思う。
- ・気になるのは学力の問題である。今まで鳥取県は全国の平均をかなり上回った形で進んできていた。しかし、今回出てきた小中学校の学力調査の結果は、ほぼ平均並みというところである。各県がそれぞれに工夫を凝らしながら学力の向上を急いでいるところであり、もともと朝読書などの良い慣行があった鳥取県のいわば貯金にもたれかかっている面がなきにしもあらずであれば、そこは正していかなければならない。ほかならぬ子どもたちが素晴らしい将来に歩み出せるように、私たちで教育環境を整えていかなければならない。さまざまな課題が見えてきており、ぜひ皆様のお力をいただければと思う。
- ・今年が明治維新、大政奉還から150年という年である。幕末に人材をつくり上げた吉田松陰はいろいろな言葉を残しており、「人間というのは誰しものが何かの黄金を持って生まれてきている。それは、聖人でも私たちでもその黄金というのは変わらないのだ」と言っている。子どもたちの中の秘めたる可能性を、実際に社会の中で、あるいは自己実現の中で役立てるようにしなければ意味がないのだと思う。そういう重い使命を私たちは背負っていることをあらためて認識しながら、皆様のお力で鳥取県の教育が良き方向に向かうことをお祈り申し上げ、皆様のご健勝をお祈り申し上げて、私からの挨拶とする。

(小倉部長)

- ・続いて中島教育委員長にご挨拶をお願いする。

(中島教育委員長)

- ・県教育委員会を代表してご挨拶申し上げます。今日は、横井委員、石原委員といったこれまでの委員に加えて、長曾委員、上萬委員、津島委員、青戸委員、大羽委員の5人に加わっていただき、新しい意見がお聞きできることを大変楽しみにしている。今は非常に変化の激しい大きな時代の中であって、教育委員会も常に多くのいろいろな意見を聞きながら、そして変化する状況を踏まえながら、いろいろな教育政策を進めるためにかなりアンテナを高くしてやっているつもりではあるが、やはり有識者委員の皆さんの意見をお聞きすることによって、非常に参考になったり、こうした方がいいと思えたりするところもあるので、ぜひ忌憚

なくいろいろなことを言っていたきたい。

- ・9月1日は関東大震災が起こった日であり防災の日であるが、その日は「自死をしないように」ということを言う日になっていて、そういう時代になったんだなと思い、すごく印象に残っている。要するに、学校では「みんなそれぞれいいところがあるんだよ」と言われていると思うが、子どもたちが自分の素晴らしさに気づけていない、自分にこんなに可能性があるんだということを思えないため、結果的に夢を持ってない子がたくさんいる。それが自死ということに時として向いてしまうのだと思い、私たちはすごく難しい時代を生きているし、そういう時代だからこそ大人がやらなければいけないこと、教育システムがやらなければいけないことというのがすごくあるんだなと痛いぐらいに感じた。昨日も一昨日も合計で3つの学校に演劇のワークショップなどで回ったが、自信を持って自分の意見を言える子が非常に少なく、この小さいコミュニティの中で空気自体を変えていけないかということをしごく思っている。
- ・今日は5つの大きなテーマに沿って、こちらからも情報を提供させていただいている。知事から話があったように、今回は全国学力・学習状況調査について少し踏み込んだ形で状況や資料を出させていただいている。各市町村のデータもこの資料の中に入っている。特に小さい地域において学校のデータが出るということが、1つの学校とか1つのクラスの問題の指摘になってしまうのではないかとということを危惧されている市町村もあり、もちろん私たちはそういうことをしようということではなく、一つ一つの少し細密なデータを見ることによって、全体の状況や問題を捉え、考えるためのベースにしたいということで皆さんにご提示をしているので、言うまでもないことではあるが、ご理解いただきたい。
- ・私は、教育というのは一人一人の持っている才能を伸ばすこと、多様な才能を伸ばすことなんだとずっと思ってきた。その点、基本は変わらないが、最近少し変わってきたところがある。それは、やっぱり一人一人の持っている可能性というのは他者との協働の中でなければ育っていかない部分であって、他者との協働の中で互いを伸ばし、伸ばされるという、システムの全体を指して教育というのではないかというふうに最近思っている。鳥取県の小さなシステムの中で、そういう方向に向けて教育がより活性化していけばいいなと思っており、ぜひ皆さんからいろいろなご助言をいただきながら、より良い教育のシステムをつくっていければと思っている。今日はよろしくお願ひ申し上げます。

(小倉部長)

- ・今回、有識者委員7名のうち5名が交代したので、名前を紹介させていただく。青戸委員、上萬委員、津島委員、長曾委員、大羽委員である。大羽委員については、今日は欠席である。

5 意見交換

(小倉部長)

- ・意見交換に入らせていただく。本日は5つのテーマを用意しているが、5つ目の「第1回総合教育会議で協議した事項の対応状況」については、前回の意見に対する対応方針を一覧表に取りまとめているので、ご覧いただければと思っている。では、教育長から説明をお願い

する。

(1) 平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果と対応策について

(山本教育長)

- ・初めに、平成 29 年度の全国学力・学習状況調査結果をもとに、小中学校の学力向上についてのご議論を賜りたい。今年度 4 月に行った調査の結果が 8 月末に出しており、調査結果について資料 1 に掲げている。国語については、全国平均との差が大きくは見られなかったが、知事から話があったように、かつては全国平均より良かったところが全国平均近くまで飲み込まれているというのが現状である。算数・数学については特に課題がある。基礎的な知識・技能の部分である A 問題で全国平均を下回ることがここ 2、3 年の傾向としてずっと続いており、ここを何とかしないといけないというのが今の大きな課題である。分析してみると、国語では特に読解力・表現力に課題が見られ、算数・数学では基礎・基本の知識・技能の確実な習得に課題がある。これには繰り返し反復して学習することが必要になってくる。
- ・質問紙調査の回答と 2 教科の正答率との関係を見ると、学習に関する関心・意欲が高い生徒ほど平均正答率がいいとか、基本的な生活習慣がしっかり確立している児童生徒、あるいは学習習慣、家庭の勉強時間などが確保されている生徒の方が平均正答率がいいという相関が出てきている。
- ・地区別、市町村別については、初めてこのような場で資料を出して議論をしていくことになった。地域別結果については、これまで西部地域が低いと言われてきていたが、今年は西部と他地域との差が埋まってきている状況である。ただ、それぞれの地域で課題があることも明らかになっている。
- ・市町村別に見ると、一番平均正答率が高い市町村と低い市町村とでは小学校の国語 B で 19 ポイントという大きな開きがあり、中学校でも数学 A で 15 ポイントの開きが出ている。市町村別でかなりばらつきが出てきており、ここに関していろいろ中身を見てみると、成果が上がっている市町村についてはやはり家庭学習あるいは復習・予習がきちりとできている、課題がある市町村についてはその辺りができていないということが質問紙調査との分析の中で出てきている。こうしたことについて県としても何らかの対応をしていく必要があるのではないかと考えている。
- ・2 ページに成果と課題を挙げている。これまで授業改革ということで、いろいろ話し合いながら授業を進めていくアクティブ・ラーニングの取り組みも進めてきており、取り組み状況などを調べてみると、やっぱり全国よりも鳥取県はしっかりと取り組んでいるということが数字として表れてきている。逆に、話し合いに時間をかけるがあまり、繰り返して反復練習する部分が従来よりも取り組めていない。その辺りが、算数・数学の A 問題ができてきてないということにつながっているのではないかと推測をしているところである。
- ・算数・数学の基礎的・基本的な習得への課題については、どこでつまづくのか、どういう問題ができてないのか、これまでの分析の中で明らかになってきているので、そこについてどういう指導を授業の中で展開していけばいいのかといったことなどを授業改善のポイント

トとしてまとめて、それを実践していくということの周知徹底を図っていく。加えて、授業のスタンダード的なものを鳥取県型として市町村と共同で作成し、徹底していくことも考えてみるのもいいのではないか。例えば、授業の初めに必ず前の授業の復習問題を何問かさせて、それがしっかりと定着しているかどうかを見て次の授業に入っていく、そんなスタンダードがつかれないかということも考えている。

- 学力の定着に向けては、「とりっこドリル」という非常にいい問題をそろえた問題集をつくっているが、活用が十分に図られていないのではないかとことがあるので、その活用に向けて取り組んでいきたい。
- 家庭での学習については、家庭にお願いするのと併せて地域の中でも補完していく取り組みも必要ではないかと思っており、宿題や家庭学習の方法についてしっかりと家庭・地域と共有していきたい。郡部は学習塾が非常に少ないということで、江府町などでは公設で塾を開く取り組みが始まっている。これは民間の塾と連携して取り組んでおり、そうした取り組みを支援していくやり方も検討したい。あるいは放課後の児童クラブなどでの活動も含めて地域の人材を活用した補充授業を充実していけないかということで、課題①、課題②などを合わせて鳥取型の学びのスタンダードのようなものがつくっていければ、1つの鳥取発信の授業、学力の向上につなげていけるのではないか。
- 読解力については、今は朝読書として、黙って本を読むことをやっているが、最近は音読することが理解につながっていくと言われており、そうした取り組みを広げていけないかと考えている。
- 自尊感情については、キャリア教育などを充実することで高めていくことにつなげていけるのではないか。
- 地域、市町村ごとの課題については、市町村としっかりとタッグを組んで、それぞれの教育課題を支援していければと考えている。その他資料を別添で付けているが、説明は省略する。

(2) 教職員の多忙解消策について

(山本教育長)

- 教職員の多忙解消について資料2を付けている。今、国を挙げて働き方改革ということが言われているが、教職員についても多忙な状況の解消が社会問題化している。学校にいろいろなことが持ち込まれてきている、あるいは教育改革を進めていく必要があるなど、いろいろな背景があって、非常に教職員の多忙な状況が続いている。そうしたことについては、昨年度、国、県それぞれで実態調査を行っている。調査の方法が若干違うが、全国に比べると鳥取県の教職員の多忙な状況というのは比較的軽い。しかし、そうはいっても過労死判定ラインといわれる月80時間を超える時間外勤務をしている教職員が小学校で6%、中学校で23.4%いる。小学校では分掌の業務をするので非常に多忙であるということ、中学校では部活動が大きな要因となっているということについては、全国的な傾向と同じである。
- これまで知事部局と一緒にあって、県立学校を中心にトヨタ式のカイゼンに倣って自分の仕事を少しずつでも効率的に進めるという学校のカイゼン運動などに取り組んできている。今

年度は、成績処理だとか児童生徒の健康状態などの情報を全てパソコンの中で処理をする、あるいはグループウェアを使って情報を共有するという、校務の業務支援システムを全国で初めて全市町村、全学校で同時に導入・活用するための準備を市町村と共同で進めているところである。

- ・併せて、今年度は過労死ラインとされる月 80 時間以上の時間外勤務をゼロにすることを目標にして、市町村と連携して取り組んでいるところであり、資料に具体的な動き等を書いている。部活動については、休養日をしっかり設けてそれを徹底していく取り組みを行っているところであり、単独で指導も引率もできる部活動指導員という職が新たに設置されたので、それをモデル的に導入しながら雇用拡大に向けて取り組んでいるところである。小中学校については、服務監督権限は市町村が持っているが、県の方でもしっかりと市町村の教員の時間外勤務の削減に向けて市町村と一緒に取り組んでいきたいと思いますということで、今、市町村にもモデル事業として取り組んでもらっている。例えば、給食費の徴収や督促を教員がやっている状況もある中で、そうした事務を教育委員会に引き上げて公会計化していくというモデル的な取り組みも行っていたきながら、時間外勤務の削減に向けて取り組んでいる。
- ・市町村では、時間外勤務を把握するシステムが十分にできていない状況がある。県では IC カードでいつ出退勤したかが明らかになるが、全国的に多くの市町村でそうしたシステムもなく、いつ出退勤したのかが正確に把握できていない状況があるため、IC カードによるシステムが市町村でも導入できないかということも検討している。
- ・今後に向けた課題として、地域や保護者にもいろいろ協力を求めていくことで解消できる部分があるのではないかと考えている。例えば、今は夏休み中のお盆を中心としてそれぞれの教員が休んでいるが、学校は開いている状態になっている。これを土日と同じように完全に閉庁してしまおうということなどを検討しているところである。

(3) 高大接続改革について

(山本教育長)

- ・資料 3 は高大接続改革の概要及び対応についてである。平成 32 年（2020 年）はオリンピック・パラリンピックがあるが、ここに向けて教育の大改革が進んでいる。そのうちの一つ、高大接続改革では、高校教育と大学教育、大学入学者選抜が三位一体で改革が進んでいる中で、入試制度が大きく変わる。これまでの大学入試センター試験に代わり、平成 32 年度から大学入学共通テストになる。これまではマークシートで選択の問題だけだったが、国語と数学では記述式の問題が入ってくる、英語では英検など民間の試験を活用する、そうした転換がなされていくことが分かってきているが、どんな新しい種類の問題が出てくるのかといったことを十分に注視しながら対応をしていく必要がある。英語については、これまでの共通テストと民間のテストのどちらを使うかを大学ごとに選ぶようになっているが、今日の新聞を見ると国立大学では両方を課すことが表明されており、こうしたことへの対応もこれから求められる。特に英語については、高校 1、2 年生の頃から何回か民間の試験にチャレンジしていくことも出てくるため、それに伴って保護者の負担が増えたり、あるいは鳥取では

受けられない試験もあつたりするので、そうしたことの不公平感をどう解消していくかということについての対応が求められる。

- ・全国学力・学習状況調査は小中しかやっていないが、高校生についてもそれに準じた民間の試験を活用しながら、それぞれの学校の学力向上に向けた取り組みを進めていこうということも高校生のための学びの基礎診断として検討されている。
- ・それぞれの大学での試験についてもあり方が見直されていく。これに対応するため、私立学校の校長先生にも入っていただきながら、検討委員会において検討しているところであり、また、アクティブ・ラーニング等授業改革に向けて東京大学などと連携しながら取り組んでいるところである。

(4) 県立美術館の検討状況について

(田中理事監兼博物館長)

- ・県立美術館の検討状況について資料4をご覧いただきたい。本県では、新たに県立美術館を建てるということで、昨年度末に倉吉に新美術館を整備しようということで基本構想を策定して、建設についての決定をしているところである。この辺については、前回のこの会議で経緯・概要を説明させていただいた。新たな委員がいらっしゃる場所で細かいところを説明できないのは非常に申し訳ないが、マスコミ等でも取り上げられているのでご承知のことかと思う。
- ・今年度は、多少の地ならしをしながら、7月から新美術館の整備について基本計画をつくるための作業に着手をしている。この関係で外部有識者を入れた委員会を2つ設けているので、その内容について説明をする。1つ目としては、さまざまな分野の有識者の方々に委員になっていただいてアドバイスをいただく美術館基本計画策定アドバイザリー委員会を設けており、8月4日に1回目の会議を開催した。主に、事業活動、賑わいづくりなどに関する意見をいただいている。基本構想では、美術館の機能として学校教育等の支援も含めて美術のラーニングセンターという機能を設けてはどうかということで大きく打ち出しをしており、その辺について、これからさまざまな分野で美術というものを生かしてアクティブ・ラーニング等に取り組んでいく中で非常に有効ではないかという肯定的な意見をいただいている。また、障がい者の作品を展示するなどの社会的包摂の取り組みについても肯定的に評価をいただいている。賑わいづくりという観点では、せつかく新たな公的施設をつくるのであれば賑わいの拠点とするような検討をしてほしいといった意見があった。その他、国内外から美術館の建物を見に来ていただけるようにしてほしいだとか、整備手法についても設計段階で十分な検討ができるようにしてほしいといった意見をいただいている。今後のスケジュールとしては、順調にいけば年度内に基本計画を取りまとめていきたいと思っている。そのために数回のアドバイザリー委員会も開催し、そのたびに意見をいただきながら調整をしてまとめるといって進めていきたいと思っている。
- ・それから、美術館が出ていった後の博物館の残った機能についてどのようにするかということで意見をいただく鳥取県立博物館協議会がある。その第2回会議の中では、博物館を活用

し、今、東部にある美術機能を博物館に少し残す形で対応して、全県的な美術振興に資するようすべきであるといった考え方を整理している。主な意見として、少し慎重な意見も何点かいただいているが、総合的には概ねご理解をいただいた。その内容を前提に、今後、次の基本構想のまとめという形で作業を進めていきたいと考えている。こういった委員会等を通じて議論を進めながら計画をまとめていくという状況である。

(小倉部長)

- ・それでは有識者委員の意見を伺いたい。横井委員から願います。

(横井委員)

- ・学力・学習状況調査の結果に関しては、学校と教育委員会と専門家の間だけで結果を共有していくのでは一番ダメだと思っている。各学校に結果が来た時に、各学校がどのように保護者の理解を求め、その理解のもとに学校がどういう計画を立てていけるかというところにかかっており、そこがうまく運ぶかが心配なところである。ぜひ各学校が保護者の理解を求める形で活用策を考えられる状況をつくっていただきたい。例として、私の学校でやっていることをお話しする。今、青翔開智では、全国の模擬試験の結果を各教科や学年で分析をして、学年ごと、クラスごと、あるいは教科ごとでそれぞれに目標を定め、三者懇談や定期的な面談の際に宿題の出し方や補習のやり方などについて生徒や保護者に提案して、補習や宿題のやり方を生徒や保護者に選んでいただくという形に変えていっている。したがって、「中学2年生は数学ばかりやっているな」と言われたりもするが、「いや、実はこういうわけですよ」と保護者も分かっている、一緒になって取り組んでいただいている状況である。せっかく市町村別まで分析されていて、なおかつ各学校もそれを分かっているのだから、ぜひそういう使い方をしていただきたい。
- ・次に、教職員の多忙解消についてお話しする。私の学校では、文書での報告業務の量を抑えるために、会議はなるべく校長室でやってもらうようにしている。要するに、全ての会議で報告はいちいちいらぬという状況をつくり出すように、私がいる限りはどんな小さな会議でも全て校長室でやってもらっている。私も全部聞いているわけにいかないのでも小耳にはさんでいるという程度であるが、教員側からすれば一応校長に言っていることになっており、責任は私がとるということになっているので、便利でいいのではないかと考えている。そんなふうな会議の合理化を図っている。
- ・教職員の多忙の関係で、今、我々が一番困っているのは、部活動の問題である。私の学校では変形労働制を取り入れているので、9時間、8時間、6時間の勤務時間があり、学校行事で長く働かないといけない日は9時間、試験期間中であるとか休み期間中であれば6時間の働き方になるように教員が調整している。ところが、年間で働ける総時間数は決まっていて、それを超えることはできないので、残業は月平均5.5時間以内でないといけないことになっており、非常に不便をしている。結局我々は、平日の午後6時以降の就業時間外の部活は一切止めてしまった。とにかく就業時間内に部活も補習も全部終わらせることにした。そのため、生徒は何日と何日と何日は補習に出てそれ以外は部活をやるという選択制に変えている。

ところが、中には強い部活があり、バドミントン、卓球、ハンドボールは全国大会にも出るぐらいのレベルになっているので、たくさん練習したいということになり、困ってしまった。苦肉の策として、全国レベルの部活動の先生方を中心にして学校外に総合スポーツクラブのようなものを自分たちでつくってもらい、そこにいろいろなボランティアの方や専門家に集まっていたるようにして、その運営を何人かの教員に別枠で任せようということを考えている。そうすれば、午後6時以降や休日に活動があっても、遠征に行ったとしても問題ないのではないかと、今みんなと相談しているところである。

- ・高大接続の関係では、先日来、大学の先生方と意見交換会がいろいろあり、いくつかに出席させていただいた。大学側がどう評価していくのかがまだ決まっていないということもあるのだと思うが、どういうふうにやっていこうかということとはなかなか決まっていない。ただ、その中で教育委員会にぜひ音頭をとっていただきたいと思うことは、今回の新しい指導要領についても教育改革についても、高校側は悩みながらいろいろな新しいことを考え出してやろうとしているわけであり、その努力を大学側に伝えて、それを大学側に評価してもらえる関係になればいいなと思っており、そういう大学とのキャッチボールの中で入試改革が行われるとありがたい。高校と大学が一番つながるのは評価だと思うので、高等学校の学習成果をどのように評価するかということがとても大事であり、その評価を大学側はどのようにバトンを受け取って、どう評価するかという点にかかってくる。今、さまざまな評価方法が取り上げられているが、評価の仕方を大学側と話し合うことができれば非常にありがたい。

(小倉部長)

- ・続いて長曾委員。

(長曾委員)

- ・私は、米子市の大学受験予備校イズムと英会話タイムライフで小中高、高卒生に英語の指導をしている。生徒の前でしゃべるのは慣れているが、このような場で話すことはほとんどないので的外れなことを申し上げたら申し訳ない。横井先生のように、立て板に水のように話せないと思うが、普段現場で生徒に接している立場から率直な考えをお話したい。
- ・学力・学習状況調査の結果によると、基礎基本となる知識技能の習得に課題があるということで、先ほど山本教育長がおっしゃったように、反復練習をする時間が少なくなっているのではないかと考えており、アクティブ・ラーニングの取り組みとの関係があるのではないかと考えている。学校ではアクティブ・ラーニングへの積極的な取り組みがなされており、そのこと自体は非常に良いのだが、例えば中学生の英語の場合、自分でいろいろな活動を行ってクラスで発表する単元があり、ページ数にすると2、3ページと少ないものであるが、これに非常に多くの時間をかけている学校が多くある。その分、単語や文法といった基礎的、基本的な勉強に裂く時間がかなり圧迫されているのではないかという感想をもっている。生徒に話を聞くと、アクティブ・ラーニングの部分に非常に時間を使っていて、テスト前になると先生が「時間がないからここは読むだけで終わりにしましょう」というふうに、重要な文法事項でもあまり説明もなく飛ばしてしまうことがよくあると話す生徒が多い。反復練習は宿題に頼っているのが現状なのではないか。そうすると、先ほどの説明にあったように、

宿題をする子としない子によってかなり基礎的な知識が身につくかどうかが変わってくる。答えを見る子もたくさんいると思う。子どもたちはかなりの量の宿題を課せられており、習い事や部活もある中で、全ての科目で宿題をこなすのが難しく、答えを写してしまうということが実際には行われているので、知識が身につけているのかどうか疑問が残る。

- 宿題のやり方については、先生から指導をしていただくのも一つの手である。宿題の量が異常ではないかと思うぐらいたくさん出されている学校もあり、夏休みの宿題で100ページの社会の問題集を3回ノートに書いてくる宿題が出ていた生徒もいた。100ページ分を3回書くとなるとノートに書くだけでも相当な労力がかかり、それだけでひと夏終わってしまったような状況だった。それが力になっていけばいいが、疑問が残る宿題の出し方をされている学校もあるようなので、ただただ大量の宿題を出すということではなく、こういうふうな宿題をすればどのような力がつくのかということを生徒が分かるように、宿題の効果も含めて家庭学習のあり方についての指導を学校からしていただきたい。
- アクティブ・ラーニングの取り組みをするときに、従来の授業のあり方が多少犠牲になるのは仕方がないが、そこは現場の先生方でバランスをとっていただきたい。これから中学の英語は全部の授業が英語で行われるというように変わっていくので、新学習指導要領を実施するに当たってもアクティブ・ラーニングだけでは英語力が身につくとは言えないと私たちは考えている。従来型のトップダウン方式の教え方とのバランスをどのようにとっていくかを考えていく必要がある。
- 教職員の多忙解消については、私自身も中学・高校の教員として以前働いていたことがあり、そのときの体験から申し上げますと、やはり会議のスリム化が一番多忙感を減らすことにつながるのではないかと思います。先ほど横井先生もおっしゃったが、伝達するための会議については文書で共有する形にする、あるいはメールなどで見られるようにするという方法でなるべく会議に費やす時間を減らしていくことが必要ではないか。
- 先生は授業準備とか教科指導に時間を使いたいと思っている人が多いと思うが、実情は担任業務や校務分掌など教科指導以外の部分で非常に時間を取られているのではないかと思います。特に担任を持っている先生は学級運営をするだけで非常に労力がかかる。難しいとは思いますが、担任を持っている先生は校務分掌の負担を軽くするとか、学級運営をしないで学年付きのような形で授業専任するベテランの先生、あるいは副担任をいくつか持って学年全体に目を配るような立場の先生を少し増やして学級運営をサポートする形にして担任業務の負担を軽減するなど、担任の先生の負担軽減が必要ではないか。
- 先生自身の意識改革も必要である。先生は真面目で責任感が強く、何でも自分でやりたいという気持ちの方が多。教材を作ったり、印刷したりすることも他の方をお願いするのは申し訳ない、自分でやりたいと考え、サポートする人がいても自分で抱え込む状態になりがちなので、手伝ってもらって当たり前という環境に変えていく必要がある。
- 良い先生になればなるほど時間外勤務をしてしまう。熱血の先生は、勤務時間以外にも生徒とのコミュニケーションや部活動、家庭訪問など数え上げれば切りがないほどたくさん仕事をやってしまうので、全てをこなしていくと、どうしても時間外勤務が多くなってしま。

そういう先生がいると、それを目標にしている若い先生たちも自分もしなければいけないという気持ちになってしまう。この辺はバランスをとるのが難しい問題だと思うし、時間になったら「はい、さようなら」というわけにもいかないのが実情だと思うが、教職員自身が労働者として自分のプライベートな時間をもつ権利があるという意識を共有できるようになっていけばいいのではないかと考える。

(小倉部長)

- ・続いて上萬委員。

(上萬委員)

- ・私は、鳥取市にある社会福祉法人鳥取福祉会に所属し、10カ所の保育園で幼児の運動指導を担当している。以前の職では、器械体操など小学校の体育的な部分も指導していた。私には中学校2年生と小学校2年生の男の子がいる。親の立場から、また自分の運動指導員としてのキャリアから感じていることや思ったことをお話ししていきたいと思っている。
- ・学力・学習状況調査の結果と対応策について、資料1の課題②に「テレビやビデオ・DVDの視聴時間が全国平均より長く、宿題や予習・復習の取り組みに課題が見られる」と書かれている。家庭での生活や学習における保護者の役割はとて大きいものの、保護者によって意識の差はすごく大きいのが実際のところである。資料には、課題に対する対応策として「学習習慣・生活習慣の確立に向けたリーフレットの作成と配布」とあり、私もこの類のリーフレットや配布物は子どもが学校からもって帰ってくるものをよく見るが、ほとんどがありがたきことしか書いてない気がする。私はどちらかというと意識のある保護者だと思っているが、意識の低い保護者もおられ、そういう方はこのリーフレットを見てどう感じるのか、むしろ目を通していないのではないかと感じてしまう。保育園でも同じように配布物をおたより帳に挟んで保護者に持って帰ってもらうが、何日も挟まったままの家庭の方も何人かいる。啓発すべきはそういった家庭であることを考えると、例えば有名人を呼んで講演をするなど、紙やお金の無駄遣いにならないような効果的な啓発方法を検討していかなければならないのではないと思う。
- ・また、運動指導員の立場として話をさせていただく。頭がさえない時にストレッチで少し体を動かすとすっきりして良いアイデアが浮かんでくるといことが多々あるように、学習と運動が密接に関係していることは最近メディアでも大きく取り上げられ、学習と運動の関連は脳科学でも証明されつつある。兵庫県豊岡市では、定期的に朝一番の活動として全身運動を行い、その後に瞑想や読書などで心を落ち着けてから1限目の学習に取り組むことにしている。一昨年、豊岡市のシンポジウムに出席したところ、全身運動をして瞑想して学習といった一連の流れを継続した結果、特に算数・数学の図形や論理的な思考力を必要とする単元で学力向上の効果が立証されているということだった。ポイントは上半身をしっかりと使って全身運動をして、その後に静かにするリセット時間をしっかりと持つところである。学校単位・クラス単位でやっている学校はあるかもしれないが、鳥取県独自の体操を作って、効果的な学習のために実行してはどうか。
- ・教職員の多忙解消に関して、部活動に係る負担軽減について提言する。基礎体力づくり、コ

ンディションを整えるなどの目的で外部のフィットネスインストラクターやフィジカルコーチといった専門の人に直接指導に来てもらってはどうか。フィジカルに関しては鳥取が世界に誇るワールドウィングもある。例えばバレー、バスケット、バドミントン、卓球など体育館で活動する全ての部活の生徒を集めて、フロア全てを使って一同にコンディショントレーニングを指導してもらい、サッカー部や野球部にはスピードつけるアスレチックトレーニングをしてもらいなどすれば、顧問の先生の指導技術や指導方法の習得にもつながるのではないかと。生徒もその競技の専門の指導者ではない人に指導してもらいことで刺激を受け、スポーツに対する広い興味を持っていくことにつながるのではないかと。直接的な負担軽減にはならないかもしれないが、このような提言をさせていただく。

(小倉部長)

- ・続いて津島委員。

(津島委員)

- ・私は鳥取県PTA協議会で監事をしており、一保護者という立場で参加させていただく。中学3年生、小学5年生、小学3年生と年少の4人の子どもがおり、中学校、小学校、こども園の3カ所に子どもを預けている。そんな中で思ったこと及びここまで皆さんの話を聞いて感じたことをお話しする。
- ・学力・学習状況調査の結果について、結果の通知は各家庭におたよりとして配布させていただいており、目を通す機会はあるが、ではどうやって学力を上げていけばいいのか、自分の子どもはどこがどういうふうに苦手でどういう対応をすればいいのかというのが、おたよりを見ただけではなかなか理解できない。横井先生がおっしゃったように、保護者の理解を求め活動の中で「こういったことがありますよ」という提案や「どういうふうにしたいですか」という投げかけがあって選択させていただけるような機会を、三者懇談の中でも時間をとっていただけると非常にありがたい。中学3年生になると進路の話もあり、高校受験に向けて弱いところやどのような対策が必要なのかということについてももちろん提案していただきたいが、三者懇談では普段の生活態度などの話もどうしても出てくるので、一人当たりの持ち時間が10分程度という限られた時間の中でどこまで提案していただけるかを検討していただきたい。
- ・長曾委員が話された、反復練習が減っているという点については、家にいても感じる場所である。家庭学習に対する子どもたちのモチベーションが低く、どうしても課題は提出しなければならぬので、とにかく出されたものをこなすことが目的になっていると感じる。やることが目的になってしまっているため、その先の力をつけるというところまで子どもたちの意識が向いていないと感じている。
- ・次に自学についてお話しする。自学とは、自主学習のことだと思うが、自主学習が宿題として出されているのは正しい形なのかどうか、非常に疑問に感じている。国語や算数・数学の宿題がドリル等が出ているのに加え、1、2ページの自学が課題として出されているが、自学についての取り決めが特にないため、机に向かう時間を増やすという点ではクリアできているが、必ずしも教科学習をしているわけではなく、絵を描いてみたり何かの本を書き写し

てみたりといった自学が多い。まず自学についての扱い方や子どもたちの自学に対する意識について統一した上で宿題として出した方がいいのではないかと学校にも話をしたことがあるが、自学の目的について保護者もよく知らされていないので、その辺りを保護者としても理解しておきたいところである。

- ・私の子どもはバスケットをしていたが、顧問の先生はバスケットの専門ではなく、ルールもご存じないような方が顧問として就いていた。幸い外部コーチに頼むことができたので、試合の時や夕方遅い時間の部活に参加して教えていただくことができていた。しかし、外部の指導者に来ていただけない部の場合、部活の目的が体力づくりということであればいいが、どうしても子どもたちは強くなりたいので、専門的な方やそのスポーツをしていた方に指導を受けたいという部もたくさんあり、外部コーチに来ていただけるようにうまく進んでいけばと思う。ただ、通常仕事をしている方であれば、勤務時間中に部活動の時間がスタートすることになり、若い人には依頼しにくいという難しさもあるので、その辺りのすり合わせがうまくいくと良いと思う。
- ・今回の議題にはないが、普段学校で参観日等の授業を見せていただく中で思っていることをお話しする。まず心の学習、道徳等に関することである。どの授業を見ても、子どもたちは「こうすべき」という本来の正解に近い意見を手を挙げて発表している。それはもちろん悪いことではなくて、良いことと悪いことの意識のすり合わせをするという意味では正しい形だと思うが、このケースの場合はこうすることが正しかった、こうすることはだめだったという答え合わせだけでなく、一步踏み込んだ形で、自分はどうか考えたらいいか、どう思ったのか、自分だったらどうするかなどを突き詰めて話をしてもらいたい。
- ・また、今はタブレット学習が進んできて、特に高学年になると学習参観の時もタブレットを使った授業が増えてきた。それを見ていて思うのが、個人差が大きいということである。先生に操作方法を指示されながら文字を打っていても、先生の指示がぱっと分かる子と分からない子がいて、やはり家でタブレット等を使っている子はすぐに使えるが、初めて触ったような子は本当に触っていいかどうか不安というところからスタートしているなど見ている。その差を埋めることは必要なことではあるが、メディアとの関わり方というところもなかなかうまくいかないところである。私の子どもが通っている学校には厚生部という部があり、メディアとの関わり方を扱っている。以前は年に2回ほど、一週間テレビを見ない、ゲームをしない、インターネットを使わないという「ノーメディアチャレンジ」をやっていたが、ここ2、3年くらい間に「ノーメディアチャレンジ」を「メディアコントロールチャレンジ」に変えて、必要な時には使うが不必要な時までは使わない、自分の中で使う時間をコントロールして使っていくための期間というふうに変えていった。生活の中でメディアと全く接触しないのは難しいということと、本当に必要な場合もあるということで、メディアから完全に切り離すのではなく、自分たちで便利に活用していくためにコントロールする方法を教えていくことが必要である。

(小倉部長)

- ・続いて石原委員。

(石原委員)

- ・まず、学力・学習状況調査の結果とその課題についていくつかお話する。確かに今までの結果や全国平均と比べると少し見劣りする部分はあるが、対策として「とりっこドリル」などの用意はしっかりされているのだから、あとはどれだけ徹底的に活用していくかということである。今日欠席されている大羽委員の資料にもあるように、どのようにしてプリントを活用させるかということについて、具体的な取り組みとして指示していく必要があると思う。
- ・次に音読プロジェクトについてお話する。子どもたちの中には、音がないと読めないという子もいるので、「音読をしましょう」と言うだけではなく、英語の教材のようにCDの配布でもスマホやタブレットで聞けるようなデータの配信でもいいので、児童が自分一人で聞いてこういうふうに音読すればいいんだと分かるような教材の用意をしていただきたい。
- ・キャリア教育の推進・充実については、今、学校にはキャリアカウンセラーがいると思うが、どういうふうに活用されているかということがよく分かっていない部分がある。進路に困っている子がいたとしても、おそらく小中高校生ぐらいで自分のキャリアに不安があると考える子はそんなにたくさんはいないと思うので、そんな時に自分の進路についてキャリアカウンセラーと一対一で話す時間を全員が持てるようにできないかと思っている。もちろん担任の先生や進路指導の先生にもそうしたことはできるとは思うが、これまで先生のキャリア指導を見ていると、個人の体験による指導しかできない先生もいるし、大学受験に受かることだけを目指した指導をする先生もいる。大学を卒業した後、どこでどう働くのかということまで掘り下げて話ができるとなると、かなりの技量が必要だと思うので、まずは個人個人がキャリアについてどこまで考えられているかという部分をキャリア指導の先生にはっきりさせてもらい、その資料をもとに担任の先生にパスして具体的に考えてもらうといったことができないかと思っている。
- ・教員の働き方改革の関係で2点ある。まず、特に進学校で多い時間外の仕事として、校外模試の監督があるが、土曜日に模試を実施する場合はPTAなどの団体が模試を主催し、先生はそこに参加する形でやっていると思うので、業務時間としてカウントされていないはずだが、実際はどうなっているのか。
- ・また、進学校ではかなりの人が放課後課外をやっている。3年生の先生がやっているため、進路指導や推薦の指導などと同時に放課後の課外をやり、また科目によっては通常の授業の内容を進めているという状況なので、振替休日が取れないと嘆いている先生もいる。そういう先生を見ると、指導の時間と労働時間というところでどのように折り合いをつけていったらいいのかと思っている。
- ・2点目は、学びのコーディネートについてである。資料を見ると、専門高校では基礎力診断テストをやっていると書いてあり、非常に良いことだと思ったが、普通科ではどうなっているのかよく分からない。普通科は大学受験を前提にしているので、先生としては大学受験の基礎力をつけたいということと、高校生としてカリキュラム上こういう能力をつけてほしいということがあるとは思いますが、大学入試における基礎と高校で求められる基礎というのはレ

ベルとしては違ってくると思う。特に進学校の場合に顕著なのが、「進学校に進学してきた子たちだからそこまで詳しく説明しなくても問題意識は分かっているでしょう」という甘えが見られる先生が何人かいて、非常に問題視している。概念上の説明はほとんどなく、例えば英語であれば発音はほとんどせず、文法の説明もなしに、ただ読ませて問題をやらせるという指導をしている先生がいることを生徒から聞いている。英語の4技能ということが言われている中でも、英語を全く聞かない、発音は英語ではなく「ローマ字読みの方が覚えやすいでしょう」と言ってローマ字読みで読んでいる先生もいると聞く。そういった科目は他にもあるという話を生徒から聞くと、どうしてそういうふうになっているのか、どういう形でアクティブ・ラーニングがやられているかといった授業のチェックができていないのではないかと感じてしまう。ぜひ聖域化せずにチェック機能を働かせていただきたい。

(小倉部長)

- ・続いて青戸委員。

(青戸委員)

- ・私は、米子にある養和病院の医療相談室でソーシャルワーカーをしている。また、養和会で5年前に野球部をつくり、11月に京都で鳥取県代表として出場するので、応援よろしくお願ひしたい。
- ・教職員の多忙解消について少しお話しする。普段仕事をする中で、主に休職中の教職員がいろいろな相談をされていることを耳にすることがあり、皆さん大変深く、強い思いで学校現場のことやいろいろな大変な状況を話してくれる。そういった状況の中、休みが長期化する先生がいれば、それをカバーする先生がいて、現場ではいろいろと難しい問題があると思う。
- ・昨年からストレスチェックの制度が始まった。これは、個人の気づきとか、ワークライフバランスにつなげていくといったことと併せて、努力義務ではあるが集団分析といったことがある。ストレスチェック制度を有効に使うには、上手な分類の仕方での分析をして、学校単位でそれをどう生かしていくかということにあると思っている。先生が、モンスターペアレントといわれるような人への対応に苦勞したり、発達障がいのある児童生徒との関わり方に苦勞したりという話もいろいろ聞いており、学校単位でいろいろな対策をとっていくことが大切である。
- ・また、昨年から県教育委員会にスクールソーシャルワーカーを法人委託してもらい、現在、学校の先生と連携しながら、行政や保護者、生徒と関わらせてもらっているところであり、法人委託は全国で鳥取県だけではないかと思っている。これはスクールカウンセラーが学校に入り始めた時代から言われていることではあるが、学校に教員以外の人間が入って一緒に協力しながらやっていくのは大変難しいということが、現在の現場でもあり、校長先生や教頭先生は大変理解をいただいているが、その他の先生と連携していくのがまだ難しい状況である。皆さんに理解していただくのは大変だが、コーディネートをしてくれる人がいるとうまくいくところもあるので、そういったところを教頭先生や校長先生にお願いして、うまく私たちを利用していただくことから、先生の負担が少しでも減ることにつながればと思っている。

- ・部活については、私も勉強より部活とかスポーツに力を入れて今まで生きてきたところがあり、先生に部活でしっかり教わったことは、ずっと残っている。強くなったり、技術を身につけたりするには、専門家に指導していただくことも大事なことだと思うが、先生であっても外部の人であっても、生徒に信頼されるような部活の指導ができればと思う。
- ・今、小学生に野球を教えているが、昔のように「こうやれ、ああやれ」と言ってもなかなか聞いてくれない。公認のアスレチックトレーナーが私のところにいるので、そういう人が「君にはこうだね、ああだね、だからこんなふうにしたらいいね」と、一人一人の体の機能に合わせて指導する方が今の子たちに合っているのであれば、理学療法士会が養成しているスクールトレーナーをはじめ、いろいろな協会で認定を受けている体育や運動の専門家に一人でも多く学校に関わっていただきたい。

(小倉部長)

- ・今日ご欠席の大羽委員からのペーパーを皆さんにお配りしている。本日の資料をご覧になって意見を紙で提出していただいた。簡単に紹介すると、算数・数学授業のスタンダードの策定について、配布しても活用されないことが多いということで工夫が必要であるという意見を出されている。「とりっこドリル」の活用について、全体的に学校では活用する文化がないと、少し厳しい意見を言われている。なぜ活用されないかを検討するよという意見である。学力の地域差については、学校ごとの取り組みはあるが、市町村単位で統一した取り組みがない。また、担任に任されているところが多いということで、学校任せ、先生任せの傾向があるのではないかということである。また、生徒指導上の問題が多くて学習指導どころではないという話をよく聞くという意見を寄せられている。
- ・以上が委員の皆様からの意見である。教育委員の皆様から一言ずつお伺いしたい。まずは鱸委員。

(鱸委員)

- ・教員の過重労働について、80時間を超える時間外勤務をいかに改善していくかという問題にいろいろな意見があった。その中でも一番難しいのは、部活動顧問の先生の時間外にどういう対応をしていくかということだと思う。青戸委員が言われたように、部活動顧問というのは、子どもにとってみれば、精神的な指導や人生の生き方についての指導もあり、部活動というのは必ずしも強くなるための教育だけが目的ではなく、それだけの目的でやるとあまり意味がないと感じている。そういう中で、どういうふうに組み合わせていくのかということについて、いろいろな意見があった。小さいときの育ちが昔と違って、親がつくり上げてきた体力とか、あるいは体育技能とかというものが小学校になるとはっきりしてくるため、両極の子どもたちが出てくることが、今一番の問題だと思う。そういう中で、幼稚園のスポーツ、運動遊びに関わる対応が大きな問題となってくる。時間外という問題になると、アスレチックトレーナーやワールドウィングの専門性を利用するか、科学的なトレーニングを組み合わせていくなど、いろいろな地域で活躍されている方のご指導を仰ぐというのは良いことである。
- ・それぞれ委員さんが言われたことは非常に良いことだが、学校管理の面で考えるといろいろ

な問題があるので、部活動の中で、学校関係者がどういうふうに管理の問題で携わっていくかというのは非常に大きな問題になってくる。

- ・今後の教育委員会で地域の資源と教員の部活動に対するあり方をしっかり検討していけば、部活動における教員の業務の過重に少しは対応できるのではないか。ただ、基本的には時間外の業務なのか業務でないかという問題なので、私立であればかなり思い切った対応で削減することはできるが、公立では一般的な通念に従って対応しないといけない面もあり、非常に難しい面もある。しかし、今後、そういう話し合いの中で解決していかないといけない問題だと思っている。

(小倉部長)

- ・続いて坂本教育委員。

(坂本委員)

- ・今日はいろいろな話を聞いてとても参考になった。先生も子どもたちも大人もみんな本当に一生懸命だというのは常日頃感じているが、今一番社会的に困っているのは人材不足ではないかと思う。年齢が上がれば上がるほど、また社会がどんどん変化していくほど人材不足のことが浮上してくる気がするので、キャリア教育や学習にもつながると思うが、ものづくりや農業など学力以外の肉体を使うことにも少し目を向けて子どもたち育てなければいけない。精神的な強さも教えたい。

(小倉部長)

- ・続いて佐伯委員。

(佐伯委員)

- ・今日はそれぞれの立場からいろいろな話を聞くことができとても参考になった。子どもたちの質問紙の回答の傾向として、4年間比較すると授業改善に関する項目が随分と良くなっており、授業改善が進んできていることが明らかだったので、私たちが取り組んできたことが間違いなく進んでいると実感した。ただ、委員から意見があったように、そのために使う時間の配分について、どうしても考える時間や話し合う時間、表現する時間が多くなるために、基本的なことの練習、習得の時間が確保できなかったというところが今回問題として出たのではないかと感じる。
- ・先日、学習院大学の先生が「学力を大きく向上させた学校はB問題が先に向上し、A問題が後に向上していることがある」と書かれているのを見て、私は少し嬉しくなった。子どもたちは今、こんなふうに考えていけばいいんだということが分かり、そして自分の考えていることを発表して間違いに気づいたり、友達から指摘されたり、自分の考えを変えたりしながら深め合っていく良さを味わえるようになってきたのではないか。とすれば、今度は自分の学びをより確かにするために、自分の足りないところをもう少し練習しなくてはと考え、宿題は嫌々答えを見ながら写していたのが、「自分のためにならないから、やっぱり自分で地道に練習するしかないな」と思ってくれるような働きかけをそれぞれの学校現場がしていき、今のサイクルをより良いものにしていけばいいと、その時に感じた。そのためには、以前からやってきていることではあるが、学校は家庭学習の取り組み状況をもう少しきちっと把握

する、宿題のやり方を言うだけではなく本当に子どもたちが自分自身で取り組んできているのかということをはっきり認めて返す、子どもの頑張りを認めるという取り組みを今後も大切にしていかないといけないということを、今回あらためて感じた。少しずつでも進んでいきたいと思っている。

- ・教職員の多忙感に関しては、小中の連携とか、教科担任制を小学校でもやっていくとか、中学校の英語の先生の力を借りながら小学校の外国語の学びをより良いものにしていくといったことをすれば、勤務時間の軽減まではいかないかもしれないが、自分だけではなくチームとして協力し合って、中学校の先生とも助け合ってやっていけるという、気持ちの上での忙しさ、負担感が、少し違う部分でやりがいにつながってくると思うので、そういうこともやっていきたいと考えている。

(小倉部長)

- ・それでは山本教育長。

(山本教育長)

- ・質問もあったので、そこにも答えながらお話しする。横井委員から保護者との共通理解が大事だという話があり、私もその通りだと思う。大多数の学校が何らかの形で保護者の理解を求めているが、質の問題がそこにはあるのではないかなと思いながら聞かせていただいた。宿題の出し方、対応の方法なども含めて長曾委員からも津島委員からも話があった。満遍型ではない格好で対応ができればと思いながら聞かせていただいた。その辺も含めて、家庭学習のあり方の部分に少し切り込んでいければと思っている。
- ・高大接続については、大学側ともしっかり連携をしながら取り組んでいく必要がある。鳥取大学とも具体的にいろいろ話をしているが、11月にシンポジウムを開いていただけることになっているので、そうした中でも先ほどの取り組みと評価をどうつなげていくかという話をさせていだきたい。
- ・長曾委員からは、アクティブ・ラーニングと反復の部分とのバランスが必要だという意見があった。私もその通りだと思いながら聞かせていただいた。今は、アクティブ・ラーニングを一生懸命言っていたことがあり、その反動というか、その結果としてこういうことになっているのではないかなと思っているが、今回の結果を見ると、やはり従来型の部分も大事にしながらか取り組んでいく必要があるとあらためて感じたところである。
- ・教職員の多忙感に関して、会議のスリム化や教職員の意識改革は非常に大きなポイントだと思っているので、しっかり対応しながら取り組みを進めていきたい。
- ・上萬委員からは、学習と運動との関係の話があった。福井県は学力も良く、体力・運動能力テストも必ず1位、2位だというように、やはり相関関係があるのではないかと睨んでいる。豊岡市の例なども参考にしながら、体力も含めて上げていく取り組みを進めていければと思う。
- ・石原委員から「とりっこドリル」の徹底の話があった。我々もそれを何とか活用してもらいたい方策が考えられればと思っている。
- ・校外模試の件については、PTAが主催しており、兼業許可を取って、模試は兼業の部分だ

ということで勤務からは切り離して取り扱いを行うようにしている。

- ・授業をチェックするという点について、日々の授業をチェックしていくのはなかなか難しいが、公開の授業もあり、以前よりも管理職が普段の授業を見回るようになっていたり、県教委も授業を見に出かけたりしている。また、生徒が先生の授業を評価するシステムもあり、アクティブ・ラーニングをどんどん導入する過程の中で、学校によっては、今回の内容だったら従来型の方が分かりやすいといった授業に対する評価が生徒から出てくることもある。そうしたチェックも必要なことだと思うので、いろいろな手段を使いながらチェックもやりつつ、授業改善につなげていきたい。
- ・青戸委員からストレス、心のケアなども含めて話があった。スクールソーシャルワーカーの件では本当にお世話になっている。全国でも珍しいということだが、苦肉の策であり、人材がない中でなんとか対応していただけないかとお願いに上がったところ、快く引き受けていただいたことに感謝を申し上げたい。そうしたことも含めて、一方では学校の中での先生の心のケアもしながら、多忙への取り組みをしていく必要があるということであらためて感じた。

(小倉部長)

- ・それでは中島教育委員長。

(中島教育委員長)

- ・新しい委員が加わり、今までとは違った新鮮な切り口でいろいろな意見をいただけて本当に良かった。お聞きする中で、授業の質に関する話が多いことに少しショックを受けた。アクティブ・ラーニングについては、我々も少し精査をしなければいけない。小中学校のことだったりするとなかなかそう言い切れないところが正直あるが、知識を獲得する授業とそれを応用して深めていくアクティブ・ラーニングとは基本的には使い分けなくてはいけなくて、何でもかんでもアクティブ・ラーニングということではないというのは当然のことであるが、混ざってしまっているという少しショックな話だった。我々の理解では、今の教育的な課題として、ただ知識として覚えている・覚えていない、マル・バツではなくて、それを使って応用できるか、そして応用することを通じて別の知識に対する興味を持つというふうに発展させていく、あるいはアクティブ・ラーニングという形で他者とコミュニケーションをすることで、「なるほど、人間というのはこういうふうに知識が深まっていくんだ」「こういうふうに学べるんだ」という学び方のフレーム自体を学んでいくという多層的なアクティブ・ラーニングの意味合いがあるのだと思うが、おそらくそのところが伝わりきっていないのではないか。そもそも宿題が多すぎるというのは、要するに授業がきちんとできていないのかという感覚も持った。石原委員からは高校の授業の質について非常に具体的な指摘もいただき、「おいおいおい」という感じだった。
- ・非常に多岐にわたる指摘をいただいたので、なかなかすぐにはお応えできないところもあるが、ポイントとしては、パートナーシップをどううまく進めていけるかである。今まで学校や教員に任せられてきた部分を保護者とどういうふうにしっかりとつながっていくか、部活で外部指導者とどういうふうにつながっていくか、そういうことがなかなか学校というシ

システムの中でうまくいっていない。そのことが、ある面では教育の質、授業の質として現れ、あるいは多忙として現れるという形で、いろいろなところに影響を与えているのではないか。学校という組織には、もちろん可能性やたくさんの宝があるが、経年的にたまってきた問題点もあり、そこを外部人材を入れながら変えなければいけないという問題意識が多くの人にあらわれるのだが、なかなか具体的な形で進行していかない。課題を何とか乗り越えていこうとすることで、今日お話のあった課題の多くが解決できるのではないかと、皆さんの話を聞きながら考えていた。

- ・津島委員から道徳の指導の仕方について話があった。道徳が教科化する中で、重要なポイントになるのが、何が正しいかを単純に覚えていくことではなくて、それももちろんあるのだが、自分について考え、他者について考えるということである。絶対的にこうしなければいけないという場面もあるが、人間がこういう場面でいかに振る舞うべきかというのは、ああすることもあつたし、こうすることもあつたよねという、答えが1つではないという意味合いで、アクティブ・ラーニング的な学びが、今、むしろ求められていると思う。道徳の指導の質についても、現場でまだ十分に周知されていないところがあるのであれば、確認していかねばいけない。
- ・部活動の指導については、すごく難しい。私も何年も教育委員やらせていただいている中で、すごくドライに考えれば外部指導者に任せてしまえばいいという考え方があり、その方が専門性は高いし、教員の多忙解消につながるのではないかと、すごく単純な解があるように思うが、青戸委員がおっしゃったように、生き方の指導的な部分というのを部活の中で担うというところがあり、そういう部分をはたしてどう考えていくのか。実際、今、いろいろな教育が効率を求められている中で、人生のいろいろな苦しいこと、悩むことに関して相談できる場面が実は結構少なくなっており、学校の中でなかなか相談する相手がいないうし、考えられる場面も少ないということがある。私は文学教育をもっとしっかりやろうという話を教育委員会ですべてしているが、人間というものがいかに複雑で、いかに悩んでしまうものかということについて、学校教育が触れなくなっている中で、もしかして意外と部活動が果たしている役割というものもあるのではないかと、話を聞きながら考えていた。部活問題も一筋縄ではいかないとあらためて思った次第である。
- ・いろいろなことを考えさせていただいたので、これを引き受けさせていただいて、何らかの形でフィードバックをさせていただきたい。

(小倉部長)

- ・最後に知事をお願いします。

(平井知事)

- ・中島教育委員長から大体のまとめがあったが、今日の話は、メンバーも変わり、また視点も変わった、大変示唆に富んだものだったと思う。結論から申し上げて、知事部局も入って教育委員会と一緒にやることは全然構わないし、そうさせていただければと思うが、いくつか出てきた方向性をもう少し分析をして戦略的に取り組む、それを予算事業にすることも含めて、新年度に向けてこの秋から取りかからせていただくにはいいスタートだと思うの

で、今日のいくつか出てきたポイントを拾ってやっていく必要があると思った。

- ・部活動の話で言えば、最近、私たちは外部コーチの導入を進めている。津島さんから「やっぱり子どもたちは強くなりたい」という話があったり、教員の多忙化などもあって、横井さんから「自分のところであれば地域のスポーツクラブなどと連携する形も考えている」という話があったり、あるいは上萬さんから「大きな体育館のようなところでまとめて専門の人が指導するようなことがあってもいいのではないか」とか、いろいろなアイデアが出てきたところである。それらについて「解があるのではないか」と中島委員長はおっしゃったが、私もそんな気がする。というのも、今ちょうどオリンピック・パラリンピックに向けて、子どもたちがどういうふうにスポーツという面で成長していくのか、人間としての成長も含めて大変に関心が高まっていて、実は、学校以外に地域の中でも子どもたちを育てたいという人がいるということである。地域の中にそういう情熱を燃やしている人たちがいたり、あるいは最近では幼稚園児にスポーツを教える塾が流行り始めて鳥取県内にもできてきている状況になっていたり、大分環境が変わってきている。学校の教員だけで全て解決するというよりは、私学だとか公立だとかいうこともなく、地域全体で解決していくということがあってもいいのではないか。基礎的なところとか、いろいろな面で共通化していけることもあると思うし、学校を卒業してしまえば子どもたちはそれぞれの世界に入って行くわけであり、ある程度、地域との連帯の中でこういうクラブ活動を整備していくこともあってもいいのではないかと思う。鳥取県の場合、各市町村で総合型スポーツクラブがかなり整備されてきた。そういういろいろな素地もできてきているので、ターニングポイントとして捉えてもいいのではないか。
- ・学習の質、家庭学習や授業のことについて、いろいろな意見が出た。確かにそういうこともあり得ると思う。アクティブ・ラーニングを始めたときに、現場も混乱したのではないかと、今日、感じられた。結局、どういうふうにやったらいいのかは、最終的には先生方で考えてくださいということになってしまい、それがはたして本当の意味で子どもたちの成長につながったかという、アクティブ・ラーニングをやったという大義名分はあっても中身がそれに伴うものがあったかどうかということで、今回の学力調査もそうであるが、必ずしも良い方向に向かっていることばかりでもないのではないだろうか。寺子屋の時代からそうだが、反復学習だとか基礎を固めるというのは小中学校時代ということなのだろうから、それはそれとして基本を大事にしながら、高校・大学の段階になったらそれぞれの段階での組み方があるのだろうと思う。最近は管理職も増えており、スーパーバイズしながらでも授業の全体の質を取りまとめたり、バランスをもう一回取り直したりしてはどうか。津島さんがおっしゃった自学というのは、私はよく分からないが、多分、現場ではうまく活用しようとしているのだろうが、どうやっていいか分からないから、とりあえず丸投げをして、子どもたちにまで丸投げしているようなこともあるかもしれない。だから、もう一度問い直してもいいことがいろいろあるのではないかということが、今日、見えた感じがするので、その辺ももう一度整理をしてみて事業化なり、カリキュラムの再編成なりを考えた方がいい。というのも、高大連携がこれから本格化をして、いよいよいろいろな新しい評価が入ってきたり、小学校

での英語教育が本格化をしたりということになり、ますます混乱が広がる可能性があるので、市町村の教育委員会や学校現場ときちっとコミュニケーションを十分とった上で、鳥取県全体で一番いい形で授業の質全体を高めていくことを目指せるようにしてはどうか。そういった意味でプリントもせっかくつくったものを活用するだとか、いろいろとテーマはあるのではないかと思う。

- ・青戸さんが話されたように、スクールカウンセラーなどについて、いわば医療現場であればチーム医療と言われるようなこと、あるいは福祉の現場と医療の現場がチームプレーを始めているようなことが、学校で十分できているのかという感じがする。特に今、暮らしにくい家庭も増えてきて、それに対する対応も必要になってくるので、誰かに任せるということではなくて、スクールカウンセラーやトレーナーなどと協力して人材を生かしてやっていくようなアプローチがやれるのではないか。大羽委員からのペーパーの中にあり、なるほどと思ったのは、ADHDの対応を担当に任せたとところで、その担当がうまくやっても、そのメソッドが周りに伝わらないといけない、一人の子どもに向き合うのにいろいろな大人が関わっている、そこが共有されなければならないということである。医療現場だとかそういうところであれば、カルテがあって、この人にはこういう対応をしましょうというのがあるのだろうが、そういうことが十分できていないというのは大羽委員のおっしゃるとおりなのかもしれない。そういう意味で、青戸委員や大羽委員がおっしゃるように、もう少しチームプレーができるような社会にしていく必要がある。福井県のような所に行つてつくづく思うのは、タテ持ちとって、いろいろな主体が関わりながら教育全体を運営しており、それが効果を上げていると思われることである。教室の中に全て任せてしまって、あとは上手にやってくれと言うだけではなく、そんなに難しいことではないので、システムティックにチームをつくったり、先ほど話もあったように校長先生や教頭先生がもっと関わったりということ、実践活動として展開していただく必要があると思う。
- ・さまざま課題が見えてきた。ぜひこれから冬場に向けて、せっかくいただいた今日の話を整理して、教育委員会と知事部局サイドでも協力できることは協力をして、来年度、良い教育がさらに一層できるようになればと思う。
- ・「蟋蟀（コオロギ）が深き地中を覗き込む」。山口誓子の句であるが、子どもたちもそうである。社会はどうなっているのか、あるいは知識の探求ということ、深い地中を見つめるコオロギのように、かけがえのないものに向き合っているのではないか。そうした子どもたちに私たちのしっかりとした導きがあれば、あとは生きていく力がそれぞれ人間として備わっているわけであり、伸びていく可能性はあるだろう。鳥取県だからできないということは全くない。むしろ鳥取県だから社会と子どもたちが近い、学校現場も課題のある子どもたちにも目を向けて向きあう、そういう教育も可能なので、変えていくチャンスはむしろこういう小さな規模のコミュニティーから生まれるのではないか。今後ともぜひ皆様のご協力、ご指導やご意見を賜るようお願いを申し上げます。

(小倉部長)

- ・以上で第2回総合教育会議を終了する。